

Nominal Licensing and Agree in Syntactic Theory: The Default Feature Specification on the Phase Heads and Its Theoretical Implications

森竹, 希望

<https://hdl.handle.net/2324/7182270>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	森竹 希望			
論文名	Nominal Licensing and Agree in Syntactic Theory: The Default Feature Specification on the Phase Heads and Its Theoretical Implications (統語理論における名詞句認可と一致—フェイズ主要部のデフォルトの素性指定とその理論的含意—)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	西岡 宣明
	副査	九州大学	教授	大橋 浩
	副査	九州大学	准教授	前田 雅子
	副査	九州大学	准教授	太田 真理

論文審査の結果の要旨

生成文法理論に基づく研究の中で名詞句の生起位置（分布）と格の問題は中核的な課題の一つであり、これまで盛んに議論されてきた。本論文は、従来の分析体系では捉えきれない名詞句の振る舞いに着目し、格付与と名詞句の認可に関する新たな分析を提示するものである。特に、デフォルト格の重要性に着目し、人称、数、性に関わる phi 素性一致の有無に基づく二種類の格付与メカニズムに加え、独自の名詞句の認可条件を提出することにより、英語、日本語、トルコ語、韓国語の広範な現象における名詞句の分布に対し、原理的な説明を与えるものである。また、英語と日本語を母語とする幼児が発話する文における主語の格標示の分析により、デフォルト値の概念による斬新な考えを提示し、普遍文法（Universal Grammar: UG）への理論的貢献も示している。

第1章で本論文が依拠する生成文法の極小主義の指針と目的を述べ、本論文の概略を示した。第2章で名詞句認可条件に関する先行研究の利点と問題点を指摘した。第3章では、現在の極小主義において広く採用されている phi 素性一致の理論的変遷を概観し、英語のような phi 素性一致を持つ言語では、Chomsky (2000, 2001) が提案するようにその反映として格付与が行われるが、日本語のような phi 素性一致を欠く言語では、Zeijlstra (2012) が否定一致現象に提案した上方一致 (upward Agree) により格付与がなされると主張した。それにより、日本語における多重主格主語構文、多重対格目的語構文、動詞句内主語/目的語への主格付与、韓国・朝鮮語の類似の現象がうまく捉えられることを示した。第4章では、デフォルト格の理論的位置づけを明らかにし、名詞句の移動の有無を考慮した二種類の名詞句認可条件を提示した。これは移動により2カ所以上に生起することになる名詞句の関係づけの必要性と、その必要性がない移動がない場合とを区別する概念的に妥当な提案である。第5章では英語の *there* 構文の意味上の主語はデフォルト格を持つと主張し、*there* 構文における数量詞繰上げの可否や、*who/whom* 問題、特殊な一致に対して、原理的説明を与えた。第6章では、英語の Mad Magazine Sentences、文断片、左方転移を分析した。移動を伴う主語の焦点化及び、左方周辺部への主語の基底生成を想定することにより、それらの文に現れるデフォルト格を伴う主語の分布が本論文で提案する名詞句認可条件により適切に説明できることを実証した。第7章では日本語の主格脱落と主語認可に関する議論を行い、音韻的要因も主格脱落の可否に関わっていることを踏まえ、名詞句認可は主格脱落の必要条件ではあるが、十分条件とはなり得ないことを論じた。第8章ではトルコ語、日本語、韓国・朝鮮語に見られる目的語の格を表示されないかき混ぜ文を分析し、談話効果を持つ場合は当該の目的語のかき混ぜが可能となることを本論文の名詞句認可条件で説明した。第9章では、英語あるいは日本語を母語として獲得する幼児が発話する文における大人と異なる主語の格標

示に対して、パラメータのデフォルト値に基づく分析を提示し、UGにおけるデフォルト値の可能性を示唆した。第10章は、論文の総括である。

本論文の最大の特徴と利点は、膨大な先行研究を入念に吟味したうえで、名詞句の移動の有無に基づく独自の認可条件を提案し、体系的にデフォルト格の生起を捉える新たな分析を提示することにより、広範な通言語的言語事実を原理的に説明することに成功した点にある。それは、実証性においてのみならず、今後の文法理論研究への理論的貢献の点からも高く評価できるものである。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。